

# 戦前の朝鮮半島に居住していた「内地人」の日本語の中に現れる朝鮮語

## —坪田譲治 [編] 『綴方子供風土記』 (1942年・実業之日本社) を中心に—

岡田 祥平(新潟大学) 生越 直樹(東京大学)

### 1. はじめに

第二次世界大戦に敗戦する以前、様々な事情により、日本列島から中国大陸や朝鮮半島をはじめとした各地域に渡った日本語母語話者がいた。そのような日本語母語話者は、当然、渡った先で日本語を母語としない人々と接触した。その結果、日本語と他言語との言語接触が起きたわけである。

そのように生じた言語接触のうち、各地域において、現地の言語や当該言語の母語話者に認められる日本語の影響については、精力的な研究が行われている(詳細は、今村・ロング編, 2021を参照)。朝鮮半島で起きたであろう言語接触についても、朝鮮語母語話者(以下、便宜的に「朝鮮人」と表記)側に起きた現象については、様々な文献や研究が存在する<sup>1</sup>。一方、朝鮮半島に居住していた日本語母語話者(以下、便宜的に「内地人」と表記)の実態に着目した研究は、少なくとも言語研究の分野では(日本語で発表されたものに限定されるが)筆者が調べた範囲ではほとんど見当たらない<sup>2</sup>。

以上のような現状を踏まえつつ、本稿では、主に坪田譲治 [編] 『綴方子供風土記』 (1942年・実業之日本社) に掲載されている、内地人が書いた綴方の中に朝鮮語が現れる用例、実例を紹介したうえで、当時の朝鮮半島における言語接触の実態、中でも朝鮮半島に居住していた内地人の言語使用の実態の解明に向けた研究の可能性を模索したい。

各種資料からの引用に当たっては、旧字体の漢字は新字体に改めた(仮名遣いは原文のままである)。また、引用中の下線は、筆者が付したものである。なお、引用中を中心に、現在の価値観では使用を避けるべき語・表現があるが、当時の状況・価値観を伝えるため、あえてそのような語・表現を使用していることを付記しておく。

### 2. 坪田譲治 [編] 『綴方子供風土記』 (1942年・実業之日本社) の中に現れる朝鮮語

#### 2.1 『綴方子供風土記』について

『綴方子供風土記』は、児童文学者の坪田譲治(1890-1982)が編纂したもので、1942年7月に実業之日本社から出版された。「関東」「奥羽」「中部」「近畿」「中国」「九州」「北海道」「朝鮮」という順番に従って設けられた地域別のセクションごとに、2,401篇の応募の中から選ばれた合計53篇の綴方が掲載されている。

『綴方子供風土記』の「あとがき」によると、坪田は「この大いなる時代の子供の生活を記録しておきたい」(「あとがき」p.1)、あるいは、「吾国の、日本の、現代の子供の生活を記録しておきたい」(「あとがき」pp.1-2)と考え、『綴方子供風土記』を編纂したという。そのような動機・意図に基づいているため、坪田は「昔から吾国の子供の生活の中に伝はつてゐる色々の行事や伝説などが記録されていなければならない」と考え、『綴方子供風土記』の編纂趣意書にその旨を記し、綴方を募集するにあたっては「地方の特色を出して下さい。」と頼んだ<sup>3</sup>とのことである(以上、引用は「あとがき」p.2より)。

#### 2.2 『綴方子供風土記』の「朝鮮」のセクションに掲載されている綴方にあられる朝鮮語

『綴方子供風土記』の「朝鮮」のセクションに掲載されている綴方は3篇である。そのすべてに、何らかの形で朝鮮語の記述が認められる。2.2.1から2.2.3では、その詳細を紹介する

##### 2.2.1 木村美紗(京城師範附属第一校三年)「お風呂たき」

この綴方は、冬の京城の内地人家庭での風呂たきの作業を手伝った様子を描いたものである。この綴方には、以下の2箇所、朝鮮語が現れる。

- (1) (前略) 今日やつと水道屋さんが来て、出るやうにしてくれましたので、お風呂をするようになりましたが、内地の方では女中といふが京城ではオモニーが、朝鮮のお正月で、田舎へかへつてゐないのでほんたうに困る事でした。(p.294)

<sup>1</sup> たとえば、朝鮮人の日本語運用能力に言及した当時の文献として、筆者の目に留まったところでは、吉村(1939)や窪川(1941)がある。また、朝鮮人が使う朝鮮語に見られる日本語の影響に言及した文献としては村上(1937)などが挙げられる(なお、村上広之による一連の研究については、安田, 2018に詳しい)。さらに、特に1990年代以降、当時の朝鮮半島における言語政策に関する研究(安田, 1997など)や朝鮮半島における「残存日本語」の研究(黄, 2021など)が精力的に行われている。

<sup>2</sup> そのような中、村上(1938:47)の註15には以下のような記述があり、内地人の使用する日本語に見られる朝鮮語の一端をうかがい知ることができ、興味深い。  
現在、朝鮮内に在る内地人によつて日常語として取り上げられてゐる朝鮮語は、凡て國語的音韻に改められてゐるが、逆にこれらの発音が鮮人間に影響してゐる。例へばオモニー(오머니-omoni)「チョンガー(청가-ŋgak)」「チエネ(치네-tŋje)」等、デパートの食堂(鮮人経営)に於けるメモなどには朝鮮料理の名称をカナで書いてある所が少なくないが、政策的に奨励すべきことと思はれる。

また、「甲賀(2021)は、各地域に渡った日本語母語話者が使用していた日本語の実態に着目した研究であり、注目に値する。ただ、甲賀(2021)で主に取り上げられているのは、「高州国」、パラオ、マリアナ諸島に住んでいた日本語母語話者が使用した日本語についてであり、朝鮮半島に居住していた内地人が使用する日本語については「標準語のなかに西日本方言が混入」(p.244)していたと触れられるのみである。

なお、内地人の使用する日本語に見られる朝鮮語に関する研究のうち、示唆的なものとしては、文学研究者による西(2012)が挙げられる。

- (2) するとお母様も「鼻とのどがへんだね」と言ってお笑ひになりました。そしてお湯の中から手をのぼして手伝つて下さいましたやつかまがあつくなつてすぐお湯もあつくなりました。「だいがあつくなつたよ、うれしいね」とおつしやいました。弟や、妹も「あつい、／＼。」とふざけてみました。あとで、
- 「きつかつたでせう。ほんたうにうちのキチペーは、よう間にあつてチョンゴシだね、もうオモニーなんかイリオブリ／＼。」<sup>(ママ)</sup> <sup>上</sup> <sup>等</sup> <sup>要らない</sup>
- と笑ひながらおつしやいました。(pp.298-299)

### 2.2.2 山崎英夫(京城師範附属校四年)「キチペ」

この綴方は、内地人家庭(山崎の家庭)で働く朝鮮人少女のことを書いたものである。この綴方は以下のような一節から始まる。そして、この綴方で朝鮮語が現れるのは、タイトルとこの箇所のみである。

- (3) 僕の家には三年近くも居た金花子といふキチペがあた。(p.300)

なお、別の箇所には以下のような記述(／は改行を表す)<sup>3</sup>もあり、(少なくとも)山崎の弟は、金花子のことを(「キチペ」ではなく)「ねえや」と呼んでいたことがうかがえる。

- (4) 弟に、金と花といふ字を教へてやつたのか、弟が、／「僕、金といふ字を、ねえやにならつて知つてるよ。」／と、得意になつて居た。(p.301)

### 2.2.3 南稔子(京城師範附属校五年)「飴売り」

この綴方は、行商の「飴売りの、おぢいさん」(p.303)の様子を描いたものである。この綴方で朝鮮語が出てくるのは、以下の1箇所である。

- (5) 右手には、大きな四十糶もあらうかと思ふやうな、ハサミを持つて、右を見たり左を見たりして、「ガチャ／＼。」とやつて行きます。(中略) 飴売りは、外の物売りのやうに、売り声を立てません。其のハサミの音を聞くと、どこからともなく、朝鮮の子供達が寄つて来ては、何か、がや／＼と言つてゐますが、何を言つてゐるのか、さつぱりわかりません。中には、「イゴオルマヨ。」とか「イゴカチヨウハ。」などと様々な事を言つて、飴売り屋のまはりには、沢山な子供でうづまつてしまひます。(pp.304-305)

## 2.3 議論①: 各用例から読み取れること

(1)から(5)の用例からは、以下のような事実が読み取れそうである。

- ① (1)(2)(3)より、内地人は、「オモニ(一)」(어머니)「キチペ(一)」(키집애?)といった朝鮮語を、日本語に取り入れていた(このことは、註2でも触れた、村上、1938の記述とも一致する)。
- ② ただし、朝鮮語の意味とは異なる形で取り入れているように思われる。たとえば、어머니は自分の母親の意味であり、(1)のように使用人の意味として使うとは考えられない。したがって、(1)のような「オモニ(一)」の意味・用法は、内地人が独自に生み出した可能性がある。また、기집애は、現代朝鮮語では계집아이の縮約語계집애に相当するが、少なくとも現代朝鮮語では、(3)のような使い方はしない(もっとも、当時の朝鮮語は現代朝鮮語とは語感が異なっていた可能性もある)。
- ③ (5)より、内地人の子供の中には朝鮮人が話す朝鮮語をカナで表記できる能力有している者もいた、あるいはカナで表記できるほど身近な朝鮮語の表現があったことをうかがわせる。ただし、正確性に欠け、朝鮮語に通曉していたとも思えない。(5)の場合、「イゴオルマヨ。」(「これいくらです」)は正確にカナで表記しているが、「イゴカチヨウハ。」は理解できない部分もある(「イゴ」は「これ」であり、「カチ」は「一緒に」だと思われるが、「ヨウハ」が解釈不能)。
- ④ (2)は、内地人の家庭での会話である。すなわち、内地人同士の会話で、朝鮮語を取り入れた日本語表現をしているということになる。ただし、朝鮮語の単語をそのままの形ではなく、「変形」した形で日本語に取り入れている<sup>5</sup>。

中でも④のように、内地人同士の会話のなかに朝鮮語が取り入れられていたという用例は、非常に興味深く思われる。日本語母語話者同士の会話に、日本語以外の言語を使用しなければならぬ必然性はないからである。もっとも、内地人同士の会話のなかに朝鮮語が取り入れられていたという用例は、現時点では(2)しか発見できておらず、このような事例は木村美紗の家庭に限定されたものであった可能性もある。

## 2.4 議論②: 『綴方子供風土記』の資料性

2.2で『綴方子供風土記』に掲載されている、内地人が書いた綴方の中に朝鮮語が現れる用例、実例を紹介したうえで、2.3ではそれに対する小考を行ったわけであるが、そもそも、『綴方子供風土記』の描写が事実に基づくかという点は、慎重に検討すべきであろう。というのも、『綴方子供風土記』以外に出版された綴方集・作文集のいくつかを確認した<sup>6</sup>のだが、そこに掲載されている内地人の綴方・作文を確認しても、朝鮮語を見出せるものはほとんど確認できなかったからである(あわせて、それらに集録されている、朝鮮人が日本語で書いた綴方・作文も確認したのだが、そこにも朝鮮語は見いだせなかったし、朝鮮語

<sup>3</sup> なお、金花子は「十四歳の時に母を失つて内地人の家で働いてゐて」(p.300)、「国語はとても上手」(p.301)だという。

<sup>4</sup> 기집애の発音をカタカナで表記すると「キジペ」になる(スは母音の後で有声音化する)。(1)や(5)のように「キチペ」という形で日本語に取り入れられている背景は、現時点では不明である。

<sup>5</sup> (5)の「チョンゴシ」は좋은 것(「よい物か」の意)と、좋은 것(よい物)に主格を表す助詞가付随した形だと思われる。(5)で「チョンゴシ」という形で使用されているのは、①좋은 것は閉音節語であり、内地人には発音が難しかった、②実際の運用では좋은 것이라는形で使用されることが多いため、chunkとして取り入れられたといった可能性が考えられる。また、「イリオブリ」は말이 없다(「必要ない、要らない」の意)だと思われるが、「オブリ」の部分が、現時点では不明である。

<sup>6</sup> 今回、確認した綴方集・作文集のうち、主なものは以下の通り。●笹目金之助・清水恒太郎・澤正編(1913)『国定準拠 最新綴方模範文集』文盛館●太田喜代次編(1933)『朝鮮優秀児童作文集』帝国々民教育奨励会●飯田豊二編(1936)『属感激実話全集第四巻 夜を動かす少年の力』金星堂●百田宗治(1938)『子供のための 教師のための 綴方読本』(上下)第一書房●綴方研究会編、島崎藤村・川端康成・森田たま選(1939)『模範綴方全集』(一年生～六年生)中央公論社●長谷執持(1940)『教室に生きたる』綴方学校社●『少年倶楽部』1940年10月号(第27巻第10号)掲載・「時局化の朝鮮作文集」●緒方明吉(1942)『もり上げる力』天理時報社●田中文治編(1943)『燃える童心』大雅社

を使用する内地人の描写も認められなかった)<sup>7</sup>。これは、どのような意味を持つのであろうか。

一つの可能性としては、『綴方子供風土記』以外の綴方集・作文集では、「方言」の使用を忌避する指導がなされていた可能性である。この点に関連して、平北定州公立普通学校の本山清が、以下のような見解を開陳している(本山, 1935:38)。

(6) 文学的な作品が綴方科の優良児童作品である事も多いが、さりとて文の社会性といふものに思ひ及ぶ時、語法語句の地方的なものには、指導者が註を付すか、或は純正標準の語句の使用をさせるやうに心がけねばならぬと思ふ。—「方言による生活」の破棄は難事であつても「国語の標準的な語句の修練とその創作表現の訓練」には多くの可能性があると信じられるからである。私の指導してゐる子供は、朝鮮語そのまゝを国語綴り方の中に表現させる事があるが、私は出来得る限りの制約を加へてゐる。

(6)のような方針が各地の綴方教育で徹底されていると考えれば、当時の綴方集・作文集に掲載されている内地人の綴方・作文には、朝鮮語が(非常に)現れにくいことに一応の説明がつく。一方、2.1でも触れた通り、「地方の特色を出して下さい。」と頼む形で募集された綴方を収めた『綴方子供風土記』では、綴方を書くにあたって(6)のような「制約」が加えられることがなかった。それゆえ、内地人が書く綴方でありながら、「地方の特色」を出すために朝鮮語をあえて使用した可能性も考えられる<sup>8</sup>。

なお、この可能性をさらに進めると、朝鮮という「地方の特色」を出すために、積極的に(実態以上に)朝鮮語を取り入れたのではないか、ということも考えられる。すなわち、『綴方子供風土記』に見られる(1), (2), (3), (5)のような記述は、「創作」を多分に含んでいて、必ずしもその当時の現実を反映していないのではないか、ということである<sup>9</sup>。

このように、『綴方子供風土記』の資料性については慎重な判断を要すると思われるわけであるが、この点については、今後の検討課題としたい。

### 3. 内地人の日本語の中に現れる朝鮮語—「オモニ (一)」「キチベ (一)」を中心に—

2.4 では、『綴方子供風土記』での描写が必ずしも当時の実態を反映していない可能性があることを指摘した。ただ、(1), (2), (3)で「オモニ (一)」や「キチベ (一)」は、『綴方子供風土記』(や註2で紹介した村上, 1938)以外の資料においても(多くの)使用が認められる。

たとえば、「オモニ (一)」や「キチベ (一)」が同時に使用されている用例としては、以下のような用例が見出せた。

(7) 全南のノリ。これがまた面白い寒い最中に毛ずねをむくり出した男やはぎもあらわな姫ごぜうならぬオモニ連からキチベ連まで海水に寒さを忘れてかき上げる年産額が二百二十五万円、(後略) (1927年11月23日・京城日報・ルビは省略)

(8) 豊門寺における国語講習会に自ら教鞭をとつてオモニやキチベの指導にあつてゐる。(1941年1月31日・京城日報=熊谷2004:235) また、「オモニ」については、以下のような用例を見出すことができた(9)のノは改行を表す)

(9) 二人のオモニノます

私共にもう十年来、一週に一二度づ洗濯に来るオモニ(鮮女のこ)がありました。(中略)「仕事がない。困るノ」と申しますから「チゲ(荷物運び)<sup>10</sup>でも人夫でもしたら」と申しても「あんな下等なことを」といひます。(中略)二ヶ月許りしてアイゴノといひながら又来ました。(中略)何べんも何べんもお礼をいつて帰りましたが、その後二ヶ月姿を見せません。それで代りのオモニを頼みました。(後略) (『婦人ノ友』1936年11月号第30巻第11号・pp.106-107・原文では漢数字以外の漢字にはルビが振られているが、不鮮明で判読困難なものも多いためルビを省略した)

(10) 乳呑児を抱へたオモニまで交る内鮮一体の国語講習会 (1941年1月31日・京城日報=熊谷2004:235)

さらに「キチベ (一)」類については、以下のような用例も発見できた<sup>11</sup>。

(11) (前略) よく見ると、黄色い汚れた朝鮮服を着た女の子が、プールの縁から一間ほど離れて、彼のばかばかしい泳ぎぶりを見てみたのであつた。年は十一、二位であろう。髪をおさげにして赤い細いリボンで結へてゐた。三造は口の中で、あやうく「キチベエ」といはうとした。キチベエといふのは「女の子」といふ意味の朝鮮語であつた。「まだ、これでも朝鮮語を少しは覚えているな」という考えが彼を微笑させた。

彼の家でも、かつて、妹が赤ん坊の時分に、この年位の朝鮮の少女を雇つたことがあつた。その時、彼は少女を「キチベエ」と

<sup>7</sup> 勿論、悉皆調査をしたわけではないため、単なる調査不足である可能性も否定できない。一方で、『綴方子供風土記』に掲載されている内地人の綴方・全3篇にはすべて何らかの形で朝鮮語が確認できたにもかかわらず、『綴方子供風土記』以外の綴方集・作文集には非常に朝鮮語が表れにくい事実は、軽視してはならないと思われる。

<sup>8</sup> なお、『綴方子供風土記』には各地の方言を取り入れた綴方も多数収められている。これは、『綴方子供風土記』の「朝鮮」のセクションに収められた綴方に朝鮮語が現れることと軌を一にした傾向と言つてよいであろう。

<sup>9</sup> そのような発想に至つたのは、花房(2020)の存在も大きい。花房(2020)によると、「お風呂たき」を書いた木村美紗とは、のちに、京都を舞台にした推理小説で有名な山村美紗(1931-1996)であるらしい。山村の父は第二次世界大戦終戦まで京城法学専門学校に勤めており、花房(2020:37)によると、山村の一家は「京城では恵まれた生活を送つていた」という。そのことを踏まえ、花房(2020:53)は、「お風呂たき」について、「実際には、当時の朝鮮は先住民の労働力は有り余つており、美紗の家にも数人のお手伝いがいるので、その家の娘が風呂たきをするのはあり得ない——つまり、これが美紗の想像による「創作」であるのは、おそらく当時の担任も承知のことだったのであろう」と推測している。

花房(2020)は、山村自身が風呂たきをするという設定が「創作」ではないかと推測しているわけだが、内地人同士の会話で朝鮮語を交えている(2)のような用例も、同様の用例が他の資料で確認できない現時点では、「地方の特色」を出すための「創作」の可能性も否定できないのではないかと考えている。

<sup>10</sup> 「チゲ」という単語も、当時の内地人にとっては身近な存在だったらしい。たとえば、松田(1913)には「朝鮮の風俗」を六つ紹介しているが、6番目が「チゲ」である(松田, 1913)には「朝鮮語にてチゲというものあり」という一節がある。また、中島敦『巡査の居る風景 一九二三年の一つのスケッチ』(筆者は、『コレクション 戦争文学17 帝国日本と朝鮮・樺太』(2012年・集英社)所収版を確認)には、「赤鬚の担手」「チゲの群衆」という一節が存在する。さらに、湯浅克衛『カンナニ』にも「チゲ」という単語の使用が認められることを付記しておく。

<sup>11</sup> これ以外に、1931年から1945年までの期間にける雑誌『家の光』のグラビアページの日本語表現を分析した遠藤(2006)には、「半島娘」に「キチベエ」というルビが振られた用例が存在とのことである(遠藤, 2006:53)。ただし、筆者は現時点ではその用例を直接確認はしていない。

呼んだり、「カンナナ」と呼んだりした。カンナナもキチベエと同じ意味の言葉であつた<sup>12</sup>。 (中島敦「ブールの傍で」<sup>13</sup>)

(12) 南鮮のキチベ (娘の意) の一日の賃 銀 (1936年1月31日・京城日報・夕刊<sup>14</sup>)

(13) キチベ (女の子) をいじめた高等科や六年の生徒 (湯浅克衛「カンナニ」<sup>15</sup>)

以上のような用例 (そして、註2で紹介した村上、1938の記述) を踏まえると、「オモニ (-)」や「キチベ (-)」は、内地人も一般的に使用していた可能性が高いと思われる。ただし、それぞれの用例に付されている解説 (日本語訳) は微妙に異なり、使用者によって意図する意味・用法が異なる可能性もあるが、その仔細については、今後の課題としたい。

なお、「オモニ (-)」や「キチベ (-)」は、内地人の間で、戦後も使用されていた可能性がある。

たとえば、広瀬 (2014) には、かつて京城公立第一高等女学校生に通っていた1923年1月生まれの女性に対し、2009年に行ったインタビューの中で、その女性が「オモニの名前なんて知らない」と発言したという記述がある。また、2.2.1で紹介した「お風呂たき」を書いた木村美紗は、推理作家・山村美紗として活躍するようになるわけだが (註9も参照)、山村の初期の作品には京城での幼少時代の経験を活かしたものがいくつか存在する。そのような作品一つである『京都・宇治川殺人事件』(2002年・光文社文庫)<sup>16</sup>には、京城から引き上げる日の描写の中に、「それでも、弁当のおにぎりを、オモニ (既婚のおばさん) やキチベ (娘) たちが握ってくれた。」という一節がある (p.181)。

#### 4. まとめ

以上、本稿では、主に『綴方子供風土記』の記述を中心に、戦前の朝鮮半島に居住していた「内地人」の日本語の中に現れる朝鮮語について、その記述の実例を紹介したうえで、小考を試みた。ただ、現時点の筆者が見出したこのような用例、実例は数少なく、課題が山積していることは言うまでもない。

当時の実態を知るためには、実際に「内地人」として、朝鮮半島に居住した人を対象にした調査を行う必要がある。ただ、第二次世界大戦終戦から80年近くが経過しようとする現在、内地人がどのような言語生活を送っていたのか、当事者本人に確認することは非常に困難であろう<sup>17</sup>。その一方で、本稿で言及したような資料、中でも従来の研究では看過されがちであったもの (大衆文学や、戦後、引き揚げてきた内地人が結成した同郷会の会誌など) を丹念に調査し、まとめれば、本稿で紹介した用例・事例を含め、当時の内地人の言語生活の一端を明らかにすることができるかもしれない<sup>18</sup>。

付記 本研究の一部は、JSPS 科研費 21K00555 の助成を受けたものです。

#### 参考文献

遠藤織枝(2006). 戦時中家庭雑誌の描く女性像 ことば, 27, 31-60.

花房観音(2020). 京都に女王と呼ばれた作家がいた 山村美紗とふたりの男 西日本出版社

広瀬玲子(2014). 植民地支配とジェンダー 朝鮮における女性植民者 ジェンダー史学, 10, 17-32.

홍은전(2020). [세상읽기] 꽃님의 복수 2020年5月12日 (<https://www.hani.co.kr/arti/opinion/column/944488.html>) (2022年1月9日)

黄永熙(2021). 朝鮮と旧満洲における帝国日本語 今村・ロング編(2021), pp.87-123.

今村圭介・ロング・ダニエル編(2021). アジア・太平洋における日本語の過去と現在 ひつじ書房

稲葉継雄(2006). 京城師範学校「演習科」第1期生について 九州大学大学院教育学研究紀要, 9, 39-52.

甲賀真広(2021). 旧植民地における日本人住民の言語使用 今村・ロング編(2021), pp.239-266.

窪川稲子(1941). 日々の伴侶 時代社

熊谷明泰(2004). 朝鮮総督府の「国語」政策資料 関西大学出版部

松田福太郎(1913). 朝鮮の風俗 上野教育, 55, 64-67.

本山清(1935). 誤り易い地方性と児童文 朝鮮公論, 23(267), 36-39.

村上廣之(1937). 朝鮮に於ける国語問題 主に日常鮮語に取入れられている国語について 国語教育, 23(1), 71-78.

村上廣之(1938). 植民地における国語教育政策 主として朝鮮語方言化、国語標準語化の問題について 教育, 6(6), 34-47.

西成彦(2012). カンナニの言語政策 立命館産業社会論集, 48(1), 31-45.

山前謙(2002). 解説 山村美紗 京都・宇治川殺人事件 光文社文庫 pp.334-339.

安田敏朗(1997). 帝国日本の言語編制 世織書房

安田敏朗(2018). 朝鮮人の言語使用はどうみえたか 村上広之の議論を中心に 近代日本言語史再考V 言葉のとらえ方をめぐって 三元社 pp.163-199.

吉村清(1939). 朝鮮の朝鮮 セルバン, 102, 82-85

<sup>12</sup> 「カンナナ」は、「生まれたばかりの赤ん坊」を意味する갓난이의方言形갓난아 (発音は갓나・カンナナ) に由来していると考えられる。なお、홍 (2020) には「가족들은 나를 그냥 갓난아, 하고 불렀지. (家族達は私をただカンナナと呼んでいた)」という一節があるが、홍 (2020) の記述は中島の記述と同じ用法を意味していると思われる。

<sup>13</sup> 正式には発表、公刊、出版されなかった未定稿。筆者が参照した『中島敦全集2』(2001年・筑摩書房)にある (勝又浩氏による)「解題」では、1932年ごろに執筆したのではないかと推測している。なお、引用中の二重取り消し線は、『中島敦全集2』に基づき、中島の原稿にある抹消を示す。

<sup>14</sup> 筆者は、「千曲時報」第72号 (1936年3月15日) の12面に転載されたもので確認した。

<sup>15</sup> 初出は『文学評論』1935年4月号。筆者は、『コレクション 戦争文学17 帝国日本と朝鮮・樺太』(2012年・集英社) 所収版を確認した。

<sup>16</sup> 当該作品は第11回江戸川乱歩賞 (1965年) の予選通過作で、山村の死後に出版が実現したものである。原題の『歪んだ階段』から改題され、「各章の見出しは編集部で新たに付け」られたものの、その他は「原形のままで世に出ることとなった」ため、「時代背景は執筆時のままである」とのことである (以上、山前, 2002:338)。

<sup>17</sup> 2006年の時点において、戦前の朝鮮半島に居住経験を持つ内地人を対象にした研究が困難になりつつあることが指摘されている (稲葉, 2006:39)。現在は、稲葉 (2006) からさらに15年の時が経過してしまっているわけである。

<sup>18</sup> なお、内地人が使用する「オモニ (-)」や「キチベ (-)」については、広瀬 (2014:26) に以下のような指摘がある。

インフォーマントの家庭21戸中18戸が韓国人使用人を雇用していた。これは常に従属する存在としての朝鮮人を目していることを意味する。使用人は「オモニ (既婚女性)」「キチベ (若い娘)」と呼び、固有名詞で呼ばない。あるいは若い娘に「ハナちゃん」というような日本風呼称をつける。使用人は一人の人格として扱われていなかった。

広瀬 (2014:26) の指摘を踏まえるならば、この種の研究を行うに当たっては、単純にどのような現象が起きていたのかといったという記述を行うだけでなく、「(オモニ (-)) や「キチベ (-)」に限らず、なぜ内地人が日本語の中に朝鮮語を使用したのか、(内地人が無自覚だったかもしれないが) どういう意図があったのか、内地人と朝鮮人の関係性をどのように反映していたのか、といった点まで考慮に入れる必要がある。